小島朋之著

模索する中国

—改革と開放の軌跡—

岩波新書

94

小島朋之著

模索する中国

―改革と開放の軌跡―

岩波新書

94

小島朋之

1943年大分県に生まれる
1973年慶応義塾大学大学院法学研究科(政治学専攻)修了
専攻－東アジア論，現代中国論
現在－京都産業大学外国語学部教授
著書－「中国政治と大衆路線」(慶応通信)
「中国の政治社会」(芦書房)
「生きた中国学」(学陽書房)
「変わりゆく中国の政治社会」(芦書房)
「さまよえる中国」(時事通信社)

模索する中国　　岩波新書(新赤版) 94

1989年11月20日　第1刷発行 ©
1990年 4 月 2 日　第2刷発行

定価550円
(本体534円)

著　者　小島朋之

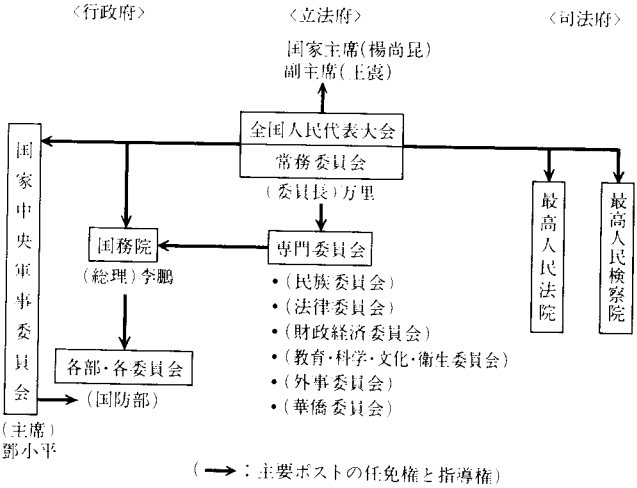
発行者　緑川亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan
ISBN4-00-430094-0

国家機関の組織図


〈行政府〉
〈立法府〉
〈司法府〉
国家主席(楊尚昆)
副主席(王震)
全国人民代表大会
常務委員会
(委員長)万里
国家中央軍事委員会
(主席)
鄧小平
国務院
(総理)李鵬
各部・各委員会
(国防部)
専門委員会
•(民族委員会)
•(法律委員会)
•(財政経済委員会)
•(教育・科学・文化・衛生委員会)
•(外事委員会)
•(華僑委員会)
最高人民法院
最高人民検察院
(→:主要ポストの任免権と指導権)

岩波新書創刊五十年、新版の発足に際して

岩波新書は、一九三八年一一月に創刊された。その前年、日本軍部は日中戦争の全面化を強行し、国際社会の指弾を招いた。しかし、アジアに覇を求めた日本は、言論思想の統制をきびしくし、世界大戦への道を歩み始めていた。出版を通して学術と社会に貢献・尽力することを終始希いつづけた岩波書店創業者は、この時流に抗して、岩波新書を創刊した。

創刊の辞は、道義の精神に則らない日本の行動を深憂し、権勢に媚び偏狭に傾く風潮と他を排撃する驕慢な思想を戒め、批判的精神と良心的行動に拠る文化日本の躍進を求めての出発であると謳っている。このような創刊の意は、戦時下においても時勢に迎合しない豊かな文化的教養の書を刊行し続けることによって、多数の読者に迎えられた。戦争は惨澹たる内外の犠牲を伴って終わり、戦時下に一時休刊の止むなきにいたった岩波新書も、一九四九年、装を赤版から青版に転じて、刊行を開始した。新しい社会を形成する気運の中で、自立的精神の糧を提供することを願っての再出発であった。赤版は一〇二点、青版は一千点の刊行を数えた。

一九七七年、岩波新書は、青版から黄版へ再び装を改めた。右の成果の上に、より一層の課題をこの叢書に課し、閉塞を排し、時代の精神を拓こうとする人々の要請に応えたいとする新たな意欲によるものであった。即ち、時代の様相は戦争直後とは全く一変し、国際的にも国内的にも大きな発展を遂げながらも、同時に混迷の度を深めて転換の時代を迎えたことを伝え、科学技術の発展と価値観の多元化は文明の意味が根本的に問い直される状況にあることを示していた。

その根源的な問は、今日に及んで、いっそう深刻である。圧倒的な人々の希いと真摯な努力にもかかわらず、地球社会は核時代の恐怖から解放されず、各地に戦火は止まず、飢えと貧窮は放置され、差別は克服されず人権侵害はつづけられている。科学技術の発展は新しい大きな可能性を生み、一方では、人間の良心の動揺につながろうとする側面を持っている。溢れる情報によって、かえって人々の現実認識は混乱に陥り、ユートピアを喪いはじめている。わが国にあっては、いまなおアジア民衆の信を得ないばかりか、近年にいたって再び独善偏狭に傾く惧れのあることを否定できない。

豊かにして勁い人間性に基づく文化の創出こそは、岩波新書が、その歩んできた同時代の現実にあって一貫して希い、目標としてきたところである。今日、その希いは最も切実である。岩波新書が創刊五十年・刊行点数一千五百点という画期を迎えて、三たび装を改めたのは、この切実な希いと、新世紀につながる時代に対応したいとするわれわれの自覚とによるものである。未来をになう若い世代の人々、現代社会に生きる男性・女性の読者、また創刊五十年の歴史を共に歩んできた経験豊かな年齢層の人々に、この叢書が一層の広がりをもって迎えられることを願って、初心に復し、飛躍を求めたいと思う。読者の皆様の御支持をねがってやまない。

（一九八八年一月）

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

政治

現代社会主義を考える　溪内謙
SDI批判　豊田利幸
ゴルバチョフの時代　下斗米伸夫
中国改革最前線　天児慧
台湾　戴國煇
新版軍縮の政治学　坂本義和
現代日本の保守政治　内田健三
中国とソ連　毛里和子
日本外交 反省と転換　浅井基文
政治とカネ　広瀬道貞
模索する中国　小島朋之

◆

近代民主主義と その展望　福田歓一
国際政治を見る眼　武者小路公秀
中東情勢を見る眼　瀬木耿太郎
データ戦後政治史　石川真澄

苦悶するアフリカ　篠田豊
香港　岡田晃
核の冬　ロワン＝ロビンソン 高榎堯訳
国際連合　明石康
国会という所　中山千夏
象徴天皇　高橋紘
イスラム急進派　岡倉徹志
パレスチナ　広河隆一
中国人民解放軍　平松茂雄

◆

近代の政治思想　福田歓一
戦後日本の保守政治　内田健三
ナチスの時代　マクラウスニック 内山敏訳

法律

プライバシーと 高度情報化社会　堀部政男
自由と国家　樋口陽一

◆

比較のなかの日本国憲法　樋口陽一
法とは何か　渡辺洋三
家庭の法律（第二版）　川島武宜
納税者の権利　北野弘久
現代日本社会と 民主主義　渡辺洋三
憲法第九条　小林直樹
嫌煙権を考える　伊佐山芳郎
地方自治法　兼子仁
家族という関係　金城清子
法を学ぶ　渡辺洋三
平和憲法　杉原泰雄

(1990. 3)

(A)

経済

世界経済入門　西川潤
石油を支配する者　瀬木耿太郎
ドルと円　宮崎義一
大恐慌のアメリカ　林敏彦
サッチャー時代のイギリス　森嶋通夫
経済学の考え方　宇沢弘文
コメを考える　祖田修
日本経済図説　宮崎勇
豊かさとは何か　暉峻淑子

◆

近代経済学の再検討　宇沢弘文
イギリスと日本　森嶋通夫
続イギリスと日本　森嶋通夫
食糧と農業を考える　大島清
穀物メジャー　石川博友
経済学とは何だろうか　佐和隆光

日本の巨大企業　中村孝俊
情報ネットワーク社会　今井賢一
挑戦する中小企業　中村秀一郎
経済データの読み方　鈴木正俊
世界経済をどう見るか　宮崎義一
日米経済摩擦　船橋洋一

◆

自動車の社会的費用　宇沢弘文

法律（青版）

憲法講話　宮沢俊義
日本の憲法（第二版）　長谷川正安
憲法読本 上・下　憲法問題研究会編
日本人の法意識　川島武宜
誤まった裁判　上田誠吉 後藤昌次郎

社会

女たちが変える アメリカ　ホーン川嶋瑤子
婦人・女性・おんな　鹿野政直
JRの光と影　立山学
ハイテク汚染　吉田文和
男と女 変わる力学　鹿嶋敬
ハイテク社会と労働　森清
ODA援助の現実　鷲見一夫
原発はなぜ危険か　田中三彦
現代の新聞　桂敬一
日本農薬事情　河野修一郎

◇

社会科学における人間　大塚久雄
住宅貧乏物語　早川和男
七つの国の労働運動 上・下　熊田亨（マルチネ）訳
公害摘発最前線　田尻宗昭

都市と交通　岡並木
汚職の構造　室伏哲郎
科学文明に未来はあるか　野坂昭如編著
貿易摩擦の社会学　田丸延男（ドーア）訳
まちづくりの発想　田村明

◇

社会科学入門　高島善哉
社会科学の方法　大塚久雄
社会認識の歩み　内田義彦
マルクス・エンゲルス小伝　大内兵衛
資本論入門　向坂逸郎
資本論の世界　内田義彦
アダム・スミス　高島善哉
マックス・ウェーバー　青山秀夫
ケインズ　伊東光晴
ユダヤ人　安堂信也（サルトル）訳
女性解放思想の歩み　水田珠枝

米軍と農民　阿波根昌鴻
原子力発電　武谷三男編
日本の公害　宮本憲一（庄司光）
水俣病　原田正純

(C)

岩波新書より

哲学・思想

新哲学入門　廣松渉
哲学以前の哲学　松浪信三郎
易のはなし　高田淳
問題群　中村雄二郎
マルクス遺稿物語　佐藤金三郎

❖

哲学の現在　中村雄二郎
日本人の死生観 上・下　加藤周一 M.ライシュ R.J.リフトン 矢島翠訳
ギリシア哲学と現代　藤沢令夫
戦後思想を考える　日高六郎
生きる場の哲学　花崎皋平
知の旅への誘い　中村雄二郎 山口昌男
働くことの意味　清水正徳
文化人類学への招待　山口昌男
死の思索　松浪信三郎

術語集　中村雄二郎
「文明論之概略」を読む 上・中・下　丸山真男
ニーチェ　三島憲一

❖

実存主義　松浪信三郎
現象学　木田元
現代論理学入門　沢田允茂
ソクラテス　田中美知太郎
プラトン　斎藤忍随
デカルト　野田又夫
ルソー　桑原武夫編
朱子学と陽明学　島田虔次
権威と権力　なだいなだ
日本の思想　丸山真男

宗教

仏教入門　三枝充悳

❖

仏教（第二版）　渡辺照宏
日本の仏教　渡辺照宏
お経の話　渡辺照宏
国家神道　村上重良
イエスとその時代　荒井献
聖書入門　小塩力
ユダヤの民と宗教　シーグフリード 鈴木一郎訳
イスラーム（回教）　蒲生礼一
天皇の祭祀　村上重良

(1990. 3)　(D)

教育

軍国美談と教科書　中内敏夫
教育入門　堀尾輝久
子育て（小児科医の助言）　山内逸郎
からだ・演劇・教育　竹内敏晴
教育とは何か　大田堯
ギリシア人の教育　廣川洋一
子どもと自然　河合雅雄

◇

教育とは何かを問いつづけて　大田堯
学力とは何か　中内敏夫
戦後教育を考える　稲垣忠彦
知力と学力　波多野誼余夫・稲垣佳世子
わが体験的教育論　中野孝次
コンピュータと教育　佐伯胖
日本教育小史　山住正己
中学校は、いま　望月一宏

◇

子どものものの考え方　滝沢武久・波多野完治
子どもの認識と感情　波多野完治
教科書　山住正己
子どもの図書館　石井桃子
私は赤ちゃん　松田道雄
私は二歳　松田道雄
自由を子どもに　松田道雄
おやじ対こども　松田道雄
母親のための人生論　松田道雄
自由と規律　池田潔
胎児の環境としての母体　荒井良

心理

知力の発達　波多野誼余夫・稲垣佳世子
子どもの心と発達　園原太郎
乳幼児の世界　野村庄吾
心とは何か　宮城音弥
新・心理学入門　宮城音弥
子どもとことば　岡本夏木
人間年輪学入門　宮城音弥
日本的自我　南博
子どもの思考力　滝沢武久
ことばと発達　岡本夏木
超能力の世界　宮城音弥
子どもの宇宙　河合隼雄

◇

社会心理学入門　南博
日本人の心理　南博
感情の世界　島崎敏樹
精神分析入門　宮城音弥
夢（第二版）　宮城音弥
人間性の心理学　宮城音弥
天才　宮城音弥
性格　宮城音弥
性格はいかにつくられるか　詫摩武俊
コンプレックス　河合隼雄
愛と憎しみ　宮城音弥
心の風物誌　島崎敏樹
生きるとは何か　島崎敏樹

言語

日本語 新版 上・下　金田一春彦
中国語と近代日本　安藤彦太郎
日本人の英語　ピーターセン
日本語と外国語　鈴木孝夫

◇

日本語の文法を考える　大野晋
言語学の誕生　風間喜代三
日本語と女　寿岳章子
英語の構造 上・下　中島文雄
日本語はどう変わるか　樺島忠夫
ことばと国家　田中克彦
翻訳語成立事情　柳父章
外国人とのコミュニケーション　ネウストプニー
記号論への招待　池上嘉彦
日本語のなかの外国語　石綿敏雄
外国語上達法　千野栄一
ことばとイメージ　川本茂雄

敬語　南不二男
日本語の構造　中島文雄
日本語以前　大野晋

◇

日本語をさかのぼる　大野晋
ことばと文化　鈴木孝夫
言語と社会　トラッドギル 土田滋訳
日本の方言　柴田武
外国語の学び方　渡辺照宏
中国語五十年　倉石武四郎
ことばとこころ　川本茂雄

芸術

演劇とは何か　鈴木忠志
映画で世界を愛せるか　佐藤忠男
ゴッホ星への旅 上・下　藤村信
私の昭和映画史　廣澤榮
たたかう映画　亀井文夫
やきもの文化史　三杉隆敏

歌舞伎のキーワード　服部幸雄
報道写真家　桑原史成
中国の音楽世界　孫玄齢 田畑佐和子訳

◇

床の間　太田博太郎
J・S・バッハ　辻荘一
モーツァルトを聴く　海老沢敏
楽譜の風景　岩城宏之
グスタフ・マーラー　柴田南雄
抽象絵画への招待　大岡信
歌右衛門の六十年　中村歌右衛門 山川静夫
ワーグナー　高辻知義
岸田劉生　富山秀男
音楽の現代史　諸井誠
マリリン・モンロー　亀井俊介
狂言役者―半代記　茂山千之丞

试读结束：需要全本请在线购买： www.er

世界史

絵で見るフランス革命　多木浩二
略奪の海カリブ　増田義郎
毛沢東　竹内実
中世の奇蹟と幻想　渡邊昌美
上海一九三〇年　尾崎秀樹

◇

ヒンドゥー教とイスラム教　荒松雄
コロンブス　増田義郎
イギリスとアジア　加藤祐三
ペスト大流行　村上陽一郎
コンスタンティノープル千年　渡辺金一
フットボールの社会史　マグーン Jr 忍足欣四郎訳
中国近現代史　小島晋丸 山松幸治
文化大革命と現代中国　安藤正士 辻康吾 太田勝洪

◇

歴史とは何か　カー 清水幾太郎訳
世界史概観 上・下　ウェルズ 長谷部・阿部訳
世界の歩み 上・下　林健太郎
インド文明の曙　辻直四郎
ヨーロッパとは何か　増田四郎
スパルタとアテネ　太田秀通
十字軍　橋口倫介
魔女狩り　森島恒雄
フランス革命 上・下　ソブール 小場瀬・渡辺訳
フランス革命小史　河野健二
ロベスピエールとフランス革命　トムソン 樋口謹一訳
フランス革命期の女たち　セレブリャコワ 西本昭治訳
平等に憑かれた人々　平岡昇
ナポレオン　井上幸治
ロシア革命運動の曙　荒畑寒村
レーニンとロシア革命　ヒルル 岡稔訳
ロシア革命五十年　ドイッチャー 山西英一訳
第二次世界大戦前夜　笹本駿二
インドとイギリス　吉岡昭彦
中国　ラティモア 平野義太郎監修 小川修訳
中国の歴史 上・中・下　貝塚茂樹
孔子　貝塚茂樹
諸子百家　貝塚茂樹
漢の武帝　吉川幸次郎
朝鮮　金達寿
インカ帝国　泉靖一
アメリカ人民の歴史 上・下　ヒューバーマン 小林・雪山訳
アメリカ黒人の歴史　本田創造

日本史

黒船異変　加藤祐三
青鞜の時代　堀場清子
日本人はどこから来たか　加藤晋平
日中アヘン戦争　江口圭一
天皇の肖像　多木浩二
正倉院　東野治之
象徴天皇制への道　中村政則

◇

世界史のなかの明治維新　芝原拓自
壬申の内乱　北山茂夫
茶の文化史　村井康彦
ある被差別部落の歴史　盛本昌広・岡田重一・森嘉兵衛・杉本良・徳一
日本中世の民衆像　網野善彦
日本文化史（第二版）　家永三郎
GHQ　竹前栄治
靖国神社　大江志乃夫
国防婦人会　藤井忠俊
日中戦争　古屋哲夫
江戸の旅　今野信雄
日本の地下鉄　和久田康雄

◇

日本の歴史 上・中・下　井上清
埋もれた金印（第二版）　藤間生大
日本神話　上田正昭
日本国家の起源　井上光貞
奈良京都　直木孝次郎
吉田松陰　林屋辰三郎
革命思想の先駆者　奈良本辰也
明治維新の舞台裏（第二版）　家永三郎
明治維新と現代　石井孝
明治の政治家たち　遠山茂樹
日韓併合小史　服部之総
昭和史（新版）　遠山茂樹・今井清一・藤原彰
近衛文麿　山辺健太郎
岡義武

文学

新しい文学のために　大江健三郎
日本の幽霊　諏訪春雄
第七折々のうた　大岡信
第八折々のうた　大岡信
女性俳句の世界　上野さち子
日本人の愛と性　暉峻康隆
芭蕉、旅へ　上野洋三
志賀直哉 上・下　本多秋五

◆

詩への架橋　大岡信
折々のうた　大岡信
続折々のうた　大岡信
第三折々のうた　大岡信
第四折々のうた　大岡信
第五折々のうた　大岡信
第六折々のうた　大岡信
万葉群像　北山茂夫
徒然草を読む　永積安明
人間喜劇の老嬢たち　寺田透
江戸名物評判記案内　中野三敏
昭和青春読書私史　安田武
色好みの構造　中村真一郎
短編小説礼讃　阿部昭
古語雑談　佐竹昭広
日本の恋歌　竹西寛子

◆

文学入門　桑原武夫
読書案内　モーリス・ブランショ　西川正身訳
世界の十大小説　モーリス・ブランショ　西川正身訳
ギリシア神話　高津春繁
ロマン・ロラン　新村猛
新唐詩選　吉川幸次郎　桑原武夫
新唐詩選続篇　吉川幸次郎　好達治
日本文学の古典（第三版）　西郷信綱　永積安明　広末保
古事記の世界　西郷信綱
源氏物語　秋山虔
平家物語　石母田正
日本の近代小説　中村光夫
日本の現代小説　中村光夫
政治家の文章　武田泰淳
詩の中にめざめる日本　真壁仁編

芸術（青版）

音楽の基礎　芥川也寸志
名画を見る眼　高階秀爾
続名画を見る眼　高階秀爾
絵を描く子供たち　北川民次
陶磁の道　三上次男
日本人とすまい　上田篤
演劇入門　千田是也
ある映画監督　新藤兼人

記録

エビと日本人　村井吉敬
燃える中南米　伊藤千尋
緑の冒険　向後元彦
地球環境報告　石弘之
障害者は、いま　大野智也
チェルノブイリ　上・下　ゲイル・ハウザー／吉本晋一郎訳
職業としての編集者　吉野源三郎
秘境・崑崙を行く　大場秀章
暮らしの中の太平洋戦争　山中恒

◈

ある盲学校教師の三十年　鈴木栄助
メキシコからの手紙　黒沼ユリ子
軍政と受難　第四・韓国からの通信　T・K生「世界」編集部編
指と耳で読む　本間一夫
徐兄弟獄中からの手紙　徐京植編訳
原爆に夫を奪われて　神田三亀男編
バナナと日本人　鶴見良行
転換期の中国　辻康吾
尾瀬—山小屋三代の記　後藤允
ああダンプ街道　佐久間充
インパール作戦従軍記　丸山静雄
モスクワ特派員報告　今井博
ヒバクシャ・イン・USA　春名幹男
農民哀史から六十年　渋谷定輔
光に向って咲け　子どもたちの太平洋戦争　粟津キヨ　山中恒
戒厳令下チリ潜入記　マルケス・後藤政子訳
エスキモー極北の文化誌　宮岡伯人
女たちのアジア　松井やより
ルソン戦—死の谷　阿利莫二
私の見たペレストロイカ　和田春樹

◈

戦没農民兵士の手紙　岩手県農村文化懇談会編
東京大空襲　早乙女勝元
ヒロシマ・ノート　大江健三郎
沖縄ノート　大江健三郎
インドで考えたこと　堀田善衛
インドで暮らす　石田保昭
ベトナム戦争　亀山旭

別冊

岩波新書の50年　岩波書店編集部編
私の昭和史　加藤周一編
私の知的生産の技術　梅棹忠夫編
昭和の終焉　岩波新書編集部編

(1990. 3)　(J)

目　次

Ⅰ　建国四十年と改革・開放十年……1
1　毛沢東の遺産……2
2　改革・開放をめぐる葛藤……15
Ⅱ　文革から現代化への過渡期……25
1　毛沢東以後の模索……26
2　華国鋒と鄧小平の葛藤……38
Ⅲ　現代化路線の確立……53
1　階級闘争から現代化へ……54

2 鄧小平体制の確立……64
3 改革と調整の綱引き……87
Ⅳ 経済体制改革の展開……95
1 鄧小平体制亀裂の兆し……96
2 改革・開放の本格化……109
Ⅴ 全面改革をめぐる攻防……129
1 経済改革から政治改革へ……130
2 「学潮」と胡耀邦の失脚……138
3 社会主義初級段階の提起……146
Ⅵ 転換期の改革・開放……165
1 新旧体制の矛盾と摩擦……166

试读结束：需要全本请在线购买： www.er